

国際文化会館だより

IHJ伝統文化シリーズ⑥／IHJアーティスト・フォーラム

一音成仏：尺八の世界

2009年2月24日に行われたIHJ伝統文化シリーズ第6回目では、海外でも根強い人気を誇る尺八をとりあげました。尺八はシンプルな構造の楽器ですが、その音楽性は禅の瞑想音楽、自然を表現した標題音楽から、ジャンル横断的、前衛的な現代音楽までと、多様かつ複雑です。このコンサートでは、人間国宝の山本邦山師とご子息の山本真山氏、虚無僧尺八の若手第一人者である善養寺恵介氏、日米芸術家交換プログラム・フェローのエリザベス・ブラウン氏をお迎えし、古典から現代曲まで幅広い尺八の魅力をご紹介しました。自身も尺八奏者である国際文化会館芸術監督のクリストファー・遙盟・ブレイズデルが、尺八の奥深さをお伝えします。



尺八思考

クリストファー・遙盟・ブレイズデル
国際文化会館芸術監督

尺八は竹でできた日本の代表的な縦笛ですが、起源も(楽器の長さを示すその)名称も日本に由来するものではありません。尺八は日本の他の伝統楽器と同様、中国から来ました。中国の縦笛は、人と物の往来、そして戦の要所となったシルクロードに位置するペルシアなど、中近東の音楽的に優れた文化から発生しました。遠く地中海から中近東を経て日本まで延び、紀元前のはるか前から現在までの数千年をまたぐ道、シルクロードを旅してきた尺八はもともと日本の楽器ではないものの、楽器として日本の中で最高レベルにまで発展してきました。世界の他の楽器に類を見ないほど、深い精神性と芸術性を持つ楽器なのです。

尺八の姿は、そのシンプルさにあると思います。尺八を作るには、真竹という種類の竹の根っこの部分を利用して、内部の節をくり抜きます。表に4つ、裏に1つの指孔を開け、内側をきめ細かく削り、漆を数回塗ります(漆を塗らない自然な型を残す「ジナシ管」という作り方もあります)。そして、管の上端部に斜めに「歌口^{うたぐち}」と呼ばれる吹き口を切り込みます。完成した楽器は、竹の原型と色および雰囲気をほとんどそのまま保っています。毛細根が無数にある尺八の下管は鐘状で、ごつごつした竹の節目が楽器を飾ります。指孔とキーがたくさんある西洋のベーム式フルートに比べ、尺八のたった5個の指孔穴は少なすぎると思われるかもしれませんが、最小限のもので最大限の表現ができるのが尺八の特徴です。制限された中で、無限の可能性が生まれるのです。

尺八の歌口を強化するために水牛の角がはめてあり、その鋭角の部分

に息を吹きつけると音が出ますが、決して音を出しやすい楽器ではありません。音の出方はちょうど小学校で使う縦笛(リコーダー)もしくはパイプ・オルガンと同じ原理ですが、尺八の場合、歌口に当たる息の強さや方向など、奏者の唇によってすべてをコントロールしなければなりません。これはリコーダーなどときわめて大きく異なる点です。高度なテクニックが要求されると同時に、表現にかなりの自由が利き、柔軟性の高い楽器といえます。

では、どのように自在に音を表現するのでしょうか。尺八の場合、音色やピッチ(音の高さ)のごく細かいところまで律することができます。指孔を部分的に塞いだり、また首の動きで歌口の角度を変えたりして、ポルタメント(ピッチのすり上げ、すり下げ)が見事に演じ分けられます。さらに、アンブシュール(歌口への唇の当て方)のごくわずかな変化によっても音色を大きくしたり、細かく変えたりできます。しかし尺八の最も魅力的な点は、自然界の音を表現する力を持つことでしょう。例えば、風や波の音、鳥や虫の鳴き声、また、鶴の羽ばたく音も見事に表象されます。

これは、尺八が自然界と深いつながりがあるからと考えられます。尺八そのものが自然体であり、その素朴な構造から生まれる高度な表現力と耽美な姿は、われわれの感覚を呼び覚まします。尺八の音色によって自然界の素晴らしさが伝わり、深い畏敬の念を抱かずにはいられません。

尺八を習う人は、自分の精神と自然に向き合うこととなります。尺八を吹くには、腹式呼吸を完全にマスターしなければなりません。息は、外から身体の中に吸い込まれ、また外へ吐き出されるというプロセスの繰り返しの中、人間の内なる世界と外界とをつなぐ重要な糸であり、大自然とのコネクターの役割を果たしています。また、呼吸だけではなく、姿勢と体のあり方を意識し、自由自在に動かせるようにしなければなりません。なぜなら、自由な体と精神を持つことは、音楽を奏するための重要な条件だからです。言い換えるなら、尺八を吹く



ことは、身体と精神を通して自分を知ることへと導いてくれるのです。

こう考えると、尺八が昔から精神を高めるための道具として使われてきたことは不思議ではありません。江戸期に普化宗と呼ばれる禅宗が成立し、僧侶(つまり虚無僧のこと)は深い天蓋をかぶり、尺八で托鉢しながら全国行脚しました。虚無僧にとって尺八は、楽器ではなく瞑想をするための法具でした。

江戸末期になると、普化宗は退廃していきますが、虚無僧が尺八を吹く最初の動機、つまり尺八を通して瞑想することはかなり純化していきます。さらに普化宗は禅宗との関係もあり、当然「禅」をするわけですが、座って禅(座禅)をするのではなく、吹いて禅(吹禅)をします。虚無僧が吹いた曲は「本曲」と呼ばれ、これは決して娯楽ではなく、瞑想や日常の儀式に使われた宗教音楽そのものでした。さらに、普化宗には全国におよそ120の虚無僧寺のネットワークがあり、各寺にその寺のみに伝承される本曲がありました。虚無僧たちは全国行脚しながら各虚無僧寺を訪ね、その本曲を覚えていったのです。

厳密に言えば、宗教音楽は瞑想および儀式などの宗教的な場合にのみ使われるものであり、同様に、芸術音楽は余興と娯楽の時だけ使われます。しかし、時の流れにしたがって、宗教音楽と芸術音楽の境界線がなくなり、かつては寺の儀式にしか使用されなかった音楽を一般的な観衆が楽しむようになり、虚無僧ではない町民などが尺八を習うようになりました。さらに日本の開国とともに、音楽としての尺八への関心が一層高まり、20世紀の中ごろまでには、かつては素朴で瞑想的だった本曲が鑑賞用の芸術音楽へと変化していったのです。

現在、主な尺八流派には琴古と都山の2つがあります。琴古流の基本レパートリーは江戸時代から伝承された、非常に精錬された本曲であり、都山流のレパートリーは主に流祖、中尾都山が作曲・編曲したものです。

一方、昔の素朴な古典本曲を原形に近いまま伝承する少数派の流派もあります。押し並べてこれらの流派を、京都、東寺の境内にある小さい寺院、明暗寺から名前を取って「明暗流」と呼びます。古典本曲は宗教性と瞑想の色彩が濃いものの、今日においては主に芸術音楽として鑑賞されています。